

ゆー  
か  
い  
は  
ん

開幕、誘拐

3

第一幕、挑発

2  
7

第二幕、第二の事件

5  
5

第三幕、名前

1  
0  
1

閉幕、ゆーかいはん

1  
4  
0

後書き

1  
7  
1

開幕、誘拐

この日、宮園邸に一本の電話が入った。

「もしもし」

「宮園さん……ですね？」

宮園はるかには電話をかけてきた相手は女だと思った。電話に出たときの相手の柔らかな態度と声の高さで何となくそう判断した。

「そうですが？ どちらさまでしょうか？」

「失礼ですが、貴女の娘さんを誘拐させていただきました」

はるかはこの言葉に思わず我を忘れてしまい、そのまま硬直してしまった。頭の中では今の言葉が何度も反芻していた。

はるかが正気に戻ったのはそれからしばらくのことだった。

「も、もしもし！ 悪い冗談じゃないでしょうね！？」

「疑われるのも無理はないですね。ならば、これならどうですか？」  
相手がそう言うてからしばらくして

「ママ」

「絵美！」

電話に出た愛娘の声をはるかが聞き間違えるはずもなく、そのまま受話器に向かって声を張り上げて娘に言葉を送った。

「絵美！ どうしたの！？」

「私、今このお姉ちゃんと一緒にいるの。色々な所に連れて行って

くれるんだって」

「絵美、そこは何処なの！」

「あ、お姉ちゃんがお母さんに代わってって言うから代わるね」

すると、電話の相手が変わって再び犯人が電話に出た。

「どうですか？　これで私が言っていることは冗談ではないとご理解いただけましたね」

「む、娘をどうするつもりですか！？　私の娘を返してください！」

はるかには涙声で犯人に向かって必死に訴えた。

しかし、犯人はうろたえもせずにはるかに向かって言った。

「残念ですけど、娘さんにはしばらく付き合っていたただかなければなりませんのでお返しするわけには参りません」

「な、何が望みなんですか！？　お金だったら何とか用意しますから……！」

「別に私はお金が望みというわけではないのですよ。安心してください、貴女さえ条件を呑んでくださればこの子は無事です」

「じょ、条件……？」

はるかは条件と言われて少し驚きと不安が頭をよぎったが、愛娘の無事を考えたならそんなことぐらいどうでもいいと思った。

「呑みます！　どんな条件でも呑みますから子供だけは……子供だけは無事に帰して！」

はるかかの返事を聞いた犯人は声色に少し喜びの色が混じった。はるかもそれを確実に感じ取っていた。

「ふふ…：そう言ってくれると本当に助かりますわ」

「それで！ 条件とは何なんですか？」

「こちらが貴女へ提示する最初の条件は“まず夫にこの旨を伝えて誰にも知らせさせずに家に帰させること”です」

「夫を家に…：？」

「そうです。但し、誘拐のことを誰にも気づかせないようにすることです。それが最初の条件です。わかりましたね？」

妙な条件だとは思ったが愛娘の命には変えられないと判断したはるかはすぐに承諾の返事を犯人に送った。

「それでは今から三時間後の午後七時にまたお電話いたします。尚、警察にはご内密にお願いいたします。もし、お約束を破ると絵美ちゃんの名の保障はいたしません。尚、七時にはお二人揃っててください」

「あの、もう一度絵美の声を…：！」

はるかかの言葉を聞かずに誘拐犯は一方的に電話を切った。

しばらくの間、はるかはその場から動くこともできなかつたが、気が少しずつ落ち着いてくるとすぐに犯人の出した条件を実行しようとして携帯電話を取り出し、そのまま夫の直哉に電話を入れた。

「もしもし」

「あ、あなた」

はるかの声聞いて、直哉は少しおどけたような或いはからかうような口調ではるかに向かって話しかけてきた。

「どうしたんだよ？ わざわざ仕事中に電話をかけてくるなんて」

「あ、あなた、大変なの！」

はるかの声が上ずっていたので、直哉は驚いて問い返した。

「ど、どうしたんだよ？ 何かあったのか？」

「絵美が…絵美が…」

「絵美がどうかしたのか？」

「絵美が…誘拐されちゃったの…」

「ええっ！？」

電話の向こうから直哉の驚く声が聞こえてきた。それを聞いて慌ててはるかが直哉に向かって言った。

「周りに気づかせないで！ 周りに誘拐のことを知られたら絵美が殺されちゃう！」

はるかの必死の訴えを聞いて、電話の向こうから直哉の声が聞こえなくなった。恐らくは、自分のように電話を耳に当てたまま硬直しているのだろうとはるかは思った。

「ちょ、ちょっと待ってる！」

直哉がそう言うとしばらく声は聞こえてこなかった。かわりに、今まで聞こえていたざわめきや電話の音などがどんどん遠のいていった。誰にも聞かれないように場所を変えている、はるかもそれを直感した。

「よし、ここなら誰にも聞かれない」

直哉の声が聞こえてくると、周りの音はほとんど聞こえなくなりより鮮明に声を聞き取ることができた。

「そ、それより、本当に絵美は誘拐されたのか!？」

「ええ……誘拐犯と名乗る人から絵美の声を聞かされたわ」

「え、絵美は無事なのか!？」

「声を大きくしないで！ 誰かに知られたら絵美が殺されちゃう！」  
はるかかの訴えで直哉も気を取り直して、声のトーンを低くして話し始めた。

「は、犯人は何を要求してきたんだ?」

「あなたに午後七時までに誘拐のことを伝えて家に戻させることが最初の条件って言っていたわ」

「午後七時までに俺を家に戻させる? 他には?」

「今はそれだけ。午後七時に二人揃っていることを条件にっていて、七時にまた電話をかけるって言っていたわ」

「け、警察には訴えたのか?」

「訴えられるわけないでしょ！　警察に訴えたら絵美を殺すって言っているのよ！」

受話器越しに飛び込んでくるはるか  
の怒鳴り声に直哉は思わず受話器を遠のけ、耳を塞いだ。

「わ、わかった。とりあえず、今日は五時には上がれるからそれから家に帰っても七時には間に合う。出来るだけ周りに気づかせないようにするんだったら、いつもどおりの時間に帰ったほうがいい」

「ええ……。でも、早く帰ってきてね」

「ああ。早く帰るから気をしっかりもつんだぞ」

「ええ」

「じゃあ、一度切るからな」

直哉ははるかに向かってそう言って携帯電話を切った。はるかとの通話を切った後に直哉の頭に重くのしかかったのは愛娘の誘拐という事実だった。

——絵美が誘拐された——

はるかから直接伝えられたとはいえ、まだ信じられない……信じたくない気持ちが直哉の中にあっただ。

直哉の心の中に絶望と不安の二文字が刻み込まれた。それと同時に、早く家に戻って詳しいことを知りたいという焦燥感にも駆られた。

混乱する頭の中を無理やり整理させて、直哉は仕事場へと戻った。仕事などとても手につきはしなかったが、それでも絵美を救うためなら、と必死になって耐えた。誰にも気づかれないように極力平静を装い、静かに五時になるのを待った。

「直哉、仕事が終わった後、飲みにいかないか？」

誘いをかけてきたのは同期の楠田だった。直哉が高校生だったときに知り合い、今も長い付き合いが続いている。

「悪い。今日は妻と娘に早く帰ると約束しているからな」

「家族サービスか……相変わらず仲がいいな」

「お前だってあんなに可愛い奥さんに子供がいるんだからたまには早く帰ってやったらどうだ？」

「そうだな……捨てられないようにたまには家族のために早く帰ってみるか」

「そうしろ」

いつもなら自然に笑いながら交わせる軽口なのだが、今はそんな余裕などなく笑顔も必死で作っているものだった。

そんな軽口を交わしている間に五時を告げる鐘の音が仕事場に響いた。直哉はそれを聞くと同時に帰る準備をして、すぐさまタイムカードを機械に記入させて仕事場を出た。

今の直哉の心の中にあるのは絵美が無事であるか否か、それだけ

だった。

仕事場を出ると脇目も振らずに駅へと向かい、ホームへと駆け込んで電車の到着を今や遅しと待った。待っている間に気持ちがいらつき、腕時計と時刻表を何度も見合わせていた。

電車がホームに到着すると一番に乗り込んで、そのまま自宅のある駅まで乗り続けた。まだ終業してから間もないので電車の中はまだ混雑していなかった。会社から家まではたった二駅程度の距離なのだが、その二駅すらも今の直弥には非常に遠く感じた。

流れ行く景色を見ながら、直哉は絵美の無事を祈り続けた。詳しい事情などわからないが、絵美が誘拐されたのなら無事を祈ることしかできないことを直弥は知っていた。

——どうか無事でいてくれ——

その一言を心の中で何度も何度も繰り返した。

電車が駅に着くと、そのままホームへと走った。改札を抜けると、そのまま走り続け、家までまっすぐ帰った。

「ただいま！」

直哉がいつもより少し大きめの声で言うと、居間から目を真っ赤に腫らしたはるかが出てきた。不安で今の今までずっと泣きとおしていた。

「あなた！」

「はるか！」

直哉とはるかは互いに抱き合った。はるかは直哉の胸の中で思いつきり泣いた。

「はるか、説明してくれ。どうしてこうなったんだ？」

はるかはすすり泣きながら直哉に話した。

「最初、誘拐犯って名乗る女から電話がかかってきて絵美を誘拐したって言うてきたの。それで、絵美がその誘拐犯と一緒にいることがわかって……」

「お前に条件として俺に誘拐されたことを伝え家に戻るように指示を出したんだな？」

はるかは静かに頷いた。直哉は頭を抱えて目を閉じた。はるか同様、直哉の頭の中も改めてはるかの話を聞いて、何が何やらと混乱していた。

「それで、午後七時にまた電話するって……」

「七時か……」

時計を見ると現在六時三十五分、誘拐犯の指定した時間まで残り二十五分に迫っていた。

「とりあえず、犯人からの電話を待とう。すまないが、何か冷たいものを用意してくれないか。ここまで走ってきたから喉がカラカラだ」

「はい……」

二人は居間へ行き、直哉は電話の傍で犯人からの連絡を待ち、はるかには直哉の注文をきくためにアイスコーヒーを作っていた。

いつもなら、直哉が帰ってくると絵美が真っ先に駆け寄って「おかえり」と言ってくれて、それに続いてはるかが出迎えてくれる。当たり前前と思えたこの日常が今はとても愛しく感じられた。

「おまたせ」

はるかは直哉にアイスコーヒーを手渡し、自分も電話の傍で犯人からの電話を待つことにした。

直哉は受け取ったアイスコーヒーをほとんど一気に飲み干した。全力で駆け抜けてきたので渴ききっていた喉も、今のアイスコーヒーで十分潤ったし、体の疲れも少し癒えたような気がした。

「絵美……きっと無事よね？」

「当たり前だろ！」

はるかの弱気な発言に、直哉が思わず怒鳴るような口調ではるかに言った。発言をした後で、直哉は我に帰って気持ちを落ち着けた。

「わざわざ電話をしているんだ。きっと、何らかの目的があるに違いない」

「そう……よね」

普段は会話の絶えない幸せな家族が、今日は一変してほとんど会

話がなくなっていた。ただ一人の愛娘の誘拐という事実によって。

長い沈黙が続いた。直哉は電話と時計を何度も見て、はるかは大抵じつとその場で電話がかかってくるのを待ち続けた。

そして――

トゥルルルル……

午後七時、テレビの時刻カウントと同時に宮園家に電話がかかってきた。直哉とはるかお互いに顔を見合わせてから緊張した面持ちで電話を取った。

「も、もしもし……」

「どうやら、条件どおりご主人様に帰宅なさっていただけたようですね？」

電話の相手ははるかがさつき話した女だった。はるかにも聞こえるように、電話のスピーカーを通じて相手の声を聞かせた。はるかが頷いたのを見て、直哉も相手が本物の誘拐犯であることを理解した。

「はい」

「どうも初めまして。さて、まずは私の言葉を信用していただくためにこれを聞いていただきましょう」

すると、犯人の声ではなく、愛娘の絵美の声が聞こえてきた。

「あつ、パパ」

「絵美！」

愛娘の元気な声を聞いて、直哉は思いっきり受話器を握り締めて声を聞き逃すまいと耳に思いっきり押し付けた。

「今、このお姉ちゃんとお食事しているの。お姉ちゃん、すごく料理が上手いんだよ」

絵美と犯人が示し合わせて「ねー」と同時に言ったのが聞こえた。

絵美がひどい扱いをされていないことに、直哉はとりあえず一安心した。

「さて、お嬢さんの無事を確認していただいたところで次の条件を出しましょうか」

突如、絵美の声から犯人の声に代わった。直哉とはるかには悲痛な面持ちで誘拐犯の次の条件を待った。

「では、次の条件です。但し、貴方達夫妻に出す条件はこの二つが最後です」

「わかりました。それで、その条件は？」

「まず一つは最初の条件を守り続けると同時に、奥さんにも誘拐されたことを誰にも言わずに内緒にすること。無論、最初の条件どおりご主人様も誰にも誘拐の事実を明かしてはなりません。いつでもどおり過ごす自信がないのであれば、有給休暇でもお取りになるとよろしいでしょう」

直哉は二つ返事でその条件を飲んだ。その程度の条件なら何の苦もなく飲むことができるためである。

「もう一つの条件は、すぐにこれから警察を呼ぶことです」

「け、警察を？」

さっきまで知らせるなど言っていた警察を呼べという犯人からの条件に直哉は思わず耳を疑った。

「ほ、本当に警察を呼ぶんですか？」

「そうです。但し、周りの住民に警察が来たという事実をわからなようにする。これが条件です。もし、周りの住民に警察が来たということがバレた時は……命の保障がないことをご了承ください。警察にも私から条件がありますので、私から電話がかかるまで大人しくしているようにと伝えてください。無論、この条件を無視した場合も……わかっていますね？」

まるで状況を楽しんでいるかのような犯人を恨めしく思ったが、直哉は静かに承諾の返事を返した。

「それでは、警察が到着した頃にもたまたお電話いたします」

犯人はそう言って電話を切った。しばらく受話器を握り締めて、その場から動かなかった直哉は、気を取り戻すとすぐに警察へと電話をした。

二回のコール音の後、電話が繋がった。

「もしもし。110番です」

「あ、あの……」

警察へ電話をかけることなど生まれて初めてのこと、直哉は少し動揺していた。直哉の同様を感じ取った電話の相手である警官は直哉を落ち着かせるように話した。

「もしもし。落ち着いてゆっくりと話してください」

直哉は二度三度深呼吸をしてから改めて電話の向こうにいる警官に向かって話し始めた。

「あ、あの……娘が、娘が誘拐されたんです」

「誘拐ですか！」

電話の向こうの警官も驚いたような声を見せたが、すぐに詳しい事情を聞こうと直哉に向かって尋ねてきた。

「本当に誘拐なんですか？」

「は、犯人から電話があって娘の声も聞かされました……」

既に直哉の声は涙声になっていて、直哉自身も大粒の涙をとめどなく流していた。

「わかりました。すぐに警官をそちらに向かわせますので落ち着いて待っていてください」

「ま、待ってください！ 犯人から条件が出ているんです！」

「条件？」

電話の向こうの警官は訝しげな声で直哉に向かって尋ねた。

「その条件とは何ですか？ 犯人から何かを要求されたのですか？」

「は、犯人は私達夫婦に警察を呼ぶように言いました」

「犯人が警察を呼ぶように？」

電話の向こうの警官も、この電話が犯人自身の指示によって行われているものだとは夢にも思わなかった。少なくとも、自分が警官になってからこんなことは生まれて初めてだった。

「それで、周りの住民に警察が来たことを悟られないようにしろと言いました。そして、それを破ったら娘の命の保障はないと……」

「わ、わかりました。それでは、十分に注意してそちらに警官を向かわせますので、どうかそのままお待ちください」

電話に出た警官は、直哉に何度も念を押してから電話を切った。

直哉は受話器を置いて静かに警官が来るのを待ち続けた。

家中がまるで喪に服したような雰囲気にも包まれていた。直哉とはるか互いに一言も交わさず、静かに警察の到着を待った。

ピンポーン

通報から一時間後、家のインターホンがなった。モニターつきのインターホンでモニターには宅配便の制服を着た男が映っていた。

「どちら様でしょうか？」

「宅配便です。印鑑をお願いいたします」

「はい……」

はるかが印鑑を持ってドアを開けると、何人もの宅配便の制服を着た男が荷物を持って家の中に入ってきた。

「えっ？」

「お静かに」

男の一人がはるかを黙らせた後、警察手帳を見せて警官だということ伝えた。

「失礼します」

警官達は居間の中に入ると、ダンボールの中に入っていた機材を取り出してすぐに準備を始めた。

「ご主人様ですね。私、警視庁捜査一課の桂木と申します」

見た所五十代くらいの男だった。なかなか貫禄のある男であると直哉もはるかも思った。

「宮園です……この度は……」

互いに握手を交わしてソファに座った。

「それで、犯人からの要求とは何なのですか？」

「誘拐犯からは自分の出す条件を飲めとだけ……」

「警察を呼ぶことも犯人からの条件だと通報の際に仰ったようですが、それは本当ですか？」

「はい。誘拐犯は周りに誘拐が起きたことを気づかせないようにと

言って、私達に警察を呼ぶように言ったのです」

「誘拐してわざわざ警察を……」

桂木はしばし考え込んだが、そんな桂木に二人は言った。

「あの……娘は無事に帰ってきますよね？」

「ご安心を。我々が必ず犯人を捕まえて娘さんを無事に保護いたします。ですので、我々に協力してください。お願いします」

桂木は二人に強く言った。言葉の言い方の強さでその伝えようとする意思の力も変わってきて、強く言えば言うほど相手に安心感やその逆に不安感を植え付けることができるものだ。

「それで、犯人が出してきた条件は警察を呼ぶことのほかに何かありますか？」

「誘拐のことを誰にも気づかせないようにと私達に言いました。私達に出してきた条件はそれで最後と書いていました。あとは警察に条件を出す……」

「警察に？」

「はい。また、電話をかけると書いていました」

「なるほど……」

桂木は宮園夫妻との会話をそこで止めて、準備をしている部下の方を見た。直哉とはるかもそれにつられて、準備をしている刑事達を見た。

「どうだ？ 準備は出来たか？」

「はい」

固定電話の側に色々な機材が取り付けられていた。会話を録音するための装置、会話を直接聞くための装置などがあつた。

「あとは犯人からの電話を待つだけです。落ち着いてください」

桂木は宮園夫妻をなだめてから窓際に立ってじつと外を見つめていた。壁に囲まれているため、外からは中の様子は見えない。したがって、外から中の様子の変化がわからないので犯人の条件に見事に沿うものだった。

慌しくなっている家の中で、桂木は一人考えていた。

——何故、犯人は誘拐したことを警察に通報するように仕向けたのか？——

通常、誘拐というのはその事実を警察には決して知られないようにして、犯人と被害者の間で取引を行おうとするものなのだ。それをわざわざ警察に知らせるなどよほどの自信がないと行えるものではない。

それに、犯人が出す条件もその意図がはっきりと掴めなかった。誰にも誘拐の事実を知らせるなどというのはわかる。

だが、その二つの条件を出しただけで他に金や物質を要求していないうちに警察を呼べと言った。ただの営利誘拐ではないと思うが、

犯人の狙いが全く理解できないでいた。

そして、警察が着てから二時間ぐらい経ったとき

トゥルルルル……

部屋中に緊張が走った。部屋の静寂を乱すのは電話のコール音だけだった。

「逆探知お願いします」

刑事の一人が備え付けた電話から逆探知をするように言った。その部屋にいる全員の表情が強張って、緊迫感に満ちていた。

「ご主人、電話に出てください」

桂木が促すと、直哉は恐る恐る受話器を取って話しかけた。

「もしもし……」

「どうやら、警察を呼んでくださったようですね？」

誘拐犯は満足したような声で最初にそう言った。

「ちゃ、ちゃんと条件どおり周辺の住民に気づかれないように警察を呼びました」

「ご苦労様です。それでは、ちよつと警察の方に代わっていただけませんか？」

誘拐犯の要求はその場にいる刑事全員が聞いていた。その中で、桂木が代表として犯人と対話することになった。

「警視庁捜査一課の桂木だ」

「どうも初めまして。この度はご迷惑をおかけいたします」

「なかなかご丁寧なご挨拶だな。誘拐をしている人間とは思えないよ」

「それはどうも。残念ですけど長々とお話ししている時間はありませんの。早速ですけど今度は警察に条件を出させていただきます」

「ほう…：今度は我々に条件か。言ってみたまえ」

「まずは時計を見てください」

桂木は壁にかかっている時計を見た。時刻は現在午後十一時四十五分だった。

「多少のずれはあるでしょうが、私の時計では午後十一時四十五分を指しています」

「こつちも同じ時刻だ」

「それはよかった。同じ時間を共有している方がより正確になりますからね」

「どういう意味だ？」

「実は、これから私と警察でゲームをしようと思っっているんです」

「ゲーム…：だと？」

桂木は相手が自分の一番嫌いなタイプであることを確信した。犯罪をゲームのように考える人間は、ここ数年の間に増えてきて桂木自身もそういう相手を逮捕したり取調べを行ったりしているが、何

度会っても腹立たしくなった。

「そうです。私に勝ったら絵美ちゃんは無事にご両親の元にお返し  
することを約束しましょう。但し、負けたら……命はありません」

「人の命をかけたゲームか……」

「そういうことです。どうですか？ やってみますか？」

口調は優しいがこれは脅迫に他ならなかった。桂木が断れば、子  
供は無条件で殺すということを誘拐犯は言っているのだ。

「やるという選択肢しか用意していないのだから？」

「まあ、そう思いたいのならそう思ってください結構です」

犯人が状況を楽しんでいるのと反対に、桂木の表情はどんどん陰  
しくなっていくた。

「で、ゲームのルールっていうのは何だ？」

「乗り気ですね。そうされると嬉しいですよ」

「いいからルールを教えてください！」

桂木が怒鳴ると犯人は少し沈黙した。

「いやあ……今の大声には驚かされました。思わず耳を塞いでしま  
いましたよ」

「くっ……！」

「それではゲームのルールをご説明いたしましょう。今、時刻は午  
後十一時五十分ですね？」

「ああ……」

「ゲーム開始は明日の金曜日午前零時から四日後の月曜日の午後七時まで。それまでに私を誰だか当てられればそちらの勝ちです。チャンスは計八回。毎日、午前七時と午後七時の二回だけこちらに電話いたします。その八回の間で私の名前を見事に言い当てることできればそちらの勝ちです」

「四日で勝負をつけるという意味か……。もし、こちらが負けたらどうなるんだ？」

「命がありません、とそれだけ言わせていただきますよ」

「そんな！」

はるかが犯人の言葉を聞いて、桂木から受話器をひったくって犯人と話をしようとした。

「お、落ち着いてください！」

その場にいた刑事が総がかりではるかを抑えて今から連れ出していった。その間もはるかは必死の抵抗をして、連れ出すのに一苦勞していた。

「すまない。少しトラブルが起きた」

「いえいえ。子供をそこまで強く思っていると知れてかえってよかったですと思っていますよ」

「親がどれだけ子供のことを思っているのかわかったなら、子供を

返してやってはくれないか？」

「残念ですけどそうはいきません。それより、ルール説明の続きをしましょう。基本的なルールはさっき言ったとおりです。それとは別に絶対に守っていたただく条件があります」

「その条件とは何だ？」

「まずは誘拐のことを絶対に周辺住民に気づかせないこと。それとゲームが終わる四日後まで何があっても絶対に公開捜査にしないこと。これがその条件です」

「わかった……。その条件を飲めばゲームをやっている間は子供の無事が保障されるんだな」

「勿論です。それでは、また午前七時にお電話いたします」

「待て！　子供が無事なのか声を聞かせてくれ！」

「もう一度時計をご覧になったらいかがです？　子供がこんな時間まで起きているはずないでしょう。とりあえず、大事なゲストですから丁寧に扱っているとだけお約束しておきましょう。それでは」

「おい、待て……！」

しかし、電話はそこで切れてしまった。桂木はしばらく受話器を睨んで、受話器を戻した。

「逆探知、駄目でした」

部下の言葉を聞いて、桂木は大きくため息を吐いた。時計を見る

と、時刻は午前零時一分前、ゲームの開始が刻一刻と迫っていた。

「これから四日が犯人と勝負か……」

そして、時計の針は午前零時を回った。

四日間のゲームがここに始まった。

## 第一幕、挑発

午前七時、犯人からの電話がかかってきた。その電話に出たのははるかだった。

「もしもし……」

「どうも。すいませんが、これからは電話には全てあの桂木って言う刑事さんが出るようにしてください」

その言葉を聞いて、すぐに桂木が犯人からの電話に出た。

「俺を窓口にしようと言うことか」

「ええ。これからはそう言うことでお願いします。もし、電話のときに貴方がいなかったらチャンスが一回潰れるとお考えください」

「わかった」

「さて、まだ私が誰だかわかりはしないでしょうからとりあえず約束の確認をしていただきましょうか」

「約束の確認？」

すると、犯人の声から絵美の声に代わった。

「ママ？」

「絵美！」

すると、はるかがすぐに受話器をひったくって娘と会話を始めた。

「おはよう、ママ」

「絵美、元気なの？ 怪我とかはしてないの！？」

「うん。ママ、このお姉ちゃんの料理とっても美味しいんだよ。ママも早く一緒に遊ぼうよ」

「絵美、何処にいるの！そこは何処なの！？」

「おっと、勝手にそんな質問をされては困りますね」

はるかか質問を聞いていたのか、その質問を出した瞬間、犯人が再び電話に出た。

「お子さんと会話をなさるのは自由ですが、私のことや居場所のことを聞くのは止めてくださいね。これが新しいルールです」

「あなた！絵美に何かしたら承知しないわよ！」

「ご安心ください。昨日も申し上げましたとおり、四日間の間はお子さんには酷いことはなさいません。四日間で警察が私に勝てばいいだけの話ですから。それより、桂木さんにもう一度電話に出ていただけませんか？」

再び桂木が受話器を取って犯人と話を始めた。

「今お聞きになられたように、電話をする際には必ず絵美ちゃんの声をそちらに聞かせて私が約束を守っていることを確認していただきます。その確認役はご両親のどちらかをお願いいたします」

「文字通り、勝てば本当に絵美ちゃんを解放してくれるんだな？」  
「勿論です。さて、貴方達にとって今からが本当のスタートでしょう。私の名前を言い当ててくれることを楽しみにしていますよ。そ

れでは、また午後七時に」

犯人との電話はそこで切れた。逆探知も試みていたが、やはり失敗に終わってしまった。

「何処までふざけた奴なんだ」

桂木は苦々しく吐き捨てるようにそう言って受話器を戻した。

「あの……」

すると、直哉が不安そうな表情で桂木に話しかけてきた。

「本当に大丈夫なのでしょうか？」

「ご心配なく。犯人は必ず我々が捕まえてお嬢さんも無事に救出いたします」

四日間……この限られた捜査期間は非常に短い。その間に犯人を見つけ出すことなどほとんど不可能に近いが、やらなければならなかった。

それでも、犯人への手がかりがほとんどないというのが桂木にとって、警察にとって非常な重圧になっていた。

「とにかく、我々は一度捜査会議のため警視庁へ戻ります。次の電話が来る午後七時までには必ずこちらに戻ります」

桂木は部下の刑事を何名かその場に残して、一度警視庁へと戻っていった。当然のことながら、この誘拐事件は極秘捜査と言うことになっているのでマスコミには報道規制がすでに敷かれている。

「只今戻りました」

「ご苦労だった。それで、犯人からの要求は何だ？」

捜査一課課長の島津は現場の担当責任者である桂木に向かって訊ねた。既に、捜査一課中の刑事が二人の周りに集まっていた。

「ゲームをして勝てたら子供を返すと言ってきました」

「ゲーム？」

「はい。今日を含めた四日間以内に一日二度かかってくる犯人の電話に犯人の名前を言い当てたら我々の勝ち。負けたら命は無いそうです」

「四日以内か……」

島津もその条件がどれほど厳しいかを知っていた。島津も長いこと刑事をやっているので誘拐事件の難しさと、どれだけ早い早期解決を求められるかを良く知っている。

「それで、犯人についての手がかりは無いのか？」

「二度ほど犯人との電話に自分が出てわかったことは、相手が女であること。それと、今現在誘拐された子供が無事であると言うことぐらいです」

「犯人が女であると言うことは確かなのか？」

「恐らく。誘拐された子供が犯人のことを「お姉ちゃん」と呼んで

いるので間違いはないと思われます」

「女か……男が犯行をするよりは周りに怪しまれないかもしれないな」

「とりあえず、犯人からの条件として何があっても四日間は公開捜査にしないことと誘拐事件のことを周辺の住民に悟られないようにするようにと言われているので、とりあえず変質者及び不審者の捜査とすることで聞き込みをしていきたいと思いますが……？」

「わかった。但し、四日間という非常に短い時間だ。各人、全身全霊を持って捜査に臨んでくれ」

『はい！』

「それと桂木、お前には今日からこいつとパートナーを組んでもらう」

島津は桂木に一人の女刑事を紹介した。

「茜沢唯巡查だ。今日からお前とパートナーを組んでもらう」

「茜沢です。よろしくお願いいたします」

「桂木だ、よろしく」

二人は握手を交わして挨拶に代えた。

「じゃあ急ぐぞ。四日間の間が勝負の時だ。君の歓迎会はその後だ」

「はい」

桂木は唯を連れて一緒に覆面パトカーで警視庁を出た。詳しい紹

介などを受けてはいなかったが、唯の雰囲気からまだ警察学校を卒業したてのヒヨっ子であるということだけは何となく理解していた。

午前九時、絵美が通っている小学校を中心とした大掛かりな捜査が開始された。捜査会議での指示通り、不審者及び変質者の捜索という名目で犯人を捜すことになった。

桂木はまず、絵美の通う小学校に向かった。小学校ならアンケート調査などを目的として情報を集めるのにはもっとも最適な場所だからである。

それに、子供というのは思った以上に警戒心が強いので見た目が怖いだけでも拒否反応を大きく示す。だからこそ、不審な人物などがいたらそれをしっかり把握していてもおかしくはない。

「そういうことですので、どうかよろしくお願いいたします」

「わかりました。では、すぐにアンケートを作成して子供達に配ります。そうですね：：大体、三時頃には全アンケートの回収が終わっていると思いますのでその頃にもう一度こちらにいらしてください」

「わかりました」

校長に警察への協力を呼びかけた後は、近所での聞き込みが始まった。宮園一家が住んでいる場所は閑静な住宅街なので見慣れない人間がいれば、すぐに誰かが気づいているだろうと桂木は思ってい

た。

「そうですねえ……最近、妙な人を見かけたことなんてありませんねえ」

「そうですか……」

桂木はこれまで五件の家、宮園夫妻に協力してもらって愛娘の絵美と仲のいい友達の家を当たってみたが、全ての家がこれと同じ回答を返してきた。

「やはり、突発的な反抗なのでしょうか？」

「茜沢。お前が犯人だったらどんな子供を誘拐する？」

「私が……ですか？」

「そうだ」

「そうですねえ……」

唯は少し考えこむような仕草を見せてから桂木に言った。

「まあ、ありきたりですけどお金を持っている家の子供でしょうか？」

「じゃあ、どうやってそれを見分ける？」

「どうやって……って、事前に下調べをしておくしかないと思いますか？」

「そうだ」

「でも、それがどうかしたんですか？」

「今回もそれと同じってことだ」

「えっ？」

唯は桂木の言っていることがはっきりと理解できず、思わず間の抜けた声で聞き返してしまった。

「今回誘拐された子は現在小学三年生。年齢にすれば八歳から九歳だ。少なくとも、知らない人に勝手にいくようなことはそうそうしない。それに誘拐された宮園絵美は電話の様子からして誘拐犯と相当親しいようだった。恐らく、自分が誘拐されているということすらわかっていないと思う」

「はあ……」

「つまりだ、誘拐される以前から犯人と何らかの接触があったということだ。そうでなければ、あそこまで誘拐された子供が落ち着いていられるわけがない」

「な、なるほど」

「とにかく、俺達は必死になって情報を集めるしかない。行くぞ」

「はい」

桂木と唯はそれから数件の家を回ったが、それでも情報らしい情報は得られず午前中は収穫を得ることはできなかった。二人は一時捜査を中断して、昼食を取るべく近くのファーストフード店に入った。

「どうだ？ 刑事になったの初仕事は？」

「疲れました」

「まだまだ長いぞ。しつかり食べておかないと先が持たないからちやんと食べておけ」

「それにしても、思ったより情報って集まらないものですね」

「当たり前だ。そう簡単に集まるのなら日本は平和なもんだし、俺達の仕事も苦労なんてことはないさ」

「それにしても、どうして犯人は絵美ちゃんを標的に選んだのでしょうか？」

それは桂木自身も疑問に思っていたことだった。特に裕福というわけでもない宮園夫妻から高額な身代金を請求しても支払えるわけがない。

だからといって、標的を無差別に選んだ突発的な誘拐でないことは、誘拐された宮園絵美の言動から察することはできる。

何のために宮園絵美に近づいたのか……どんなに考えを巡らせてもその理由が浮かんでくることはなかった。

「午後はどうしますか？」

「とりあえず、学校でのアンケートを待とう。恐らく、午後も同じように家を渡り歩いて親からでは情報を得ることはできないだろう。だから、親の知らない子供の情報に期待しよう」

「子供の情報……ですか」

「信用できないって顔をしているな？」

「どうも子供からというのは……」

「確かにガセも少なくはないが。子供というのは人間には敏感なものだぞ。特に通学路上で普段見ない人間というのはかなり強烈に印象付けられる。一人からの情報だと信用するか否かの判断に困るが複数の人間からだと言用してみる価値はある」

桂木の言葉をまだ納得しきれていなかったが、唯はもう何も言い返さなかった。少なくとも相手は自分より場数を多く踏んでいるので、いざと言うときの判断やその判断材料は自分よりも明らかに多いことを知っていたからだ。

二人は約束の三時までまた聞き込みでもしようかと相談していた時、唯の携帯電話が鳴った。桂木も持つてはいるが、未だに使い方をよく理解していないので若い唯のほうが繋がりやすいと思ったのだろう。

ビデオの予約も満足にできないアナログ人間は時代に取り残され始めているという実感を桂木が得た瞬間だった。

「もしもし」

「今、何処にいる？」

電話の向こうの相手は島津だった。

「今は駅周辺でお昼を食べているところですが……」

桂木は唯の応答を聞いて頭を抱えた。正直はいいことだが、こんな切羽詰っている状況にのんびり昼飯を食べていると知られたらどんな説教が飛んでくるかと考えるとそれは容易に想像できるだろう。

「それなら丁度いい。今からすぐに行って欲しいところがある」

「何か情報でも？」

「いいや。別件だ。一人暮らしの老人が死体で発見された。悪いがすぐにそっちに行ってくれ」

「わかりました」

唯はメモに現場の住所を書き留めるとすぐに行くと言事を返して電話を切った。

「何だって？」

「一人暮らしをしていた老人が死体で発見されたそうです。すぐに現場へ向かってくれとのことですよ」

「……そうか」

桂木は席を立つと、出口へは向かわずレジへと向かった。

「悪いけど、ジュースをテイクアウトで」

「ありがとうございます」

「あと、持ち帰るときは紙じゃなくてビニールの大きな袋でお願いできる？」

「はい。かしこまりました」

桂木はジュースの一番小さいサイズを購入して、出口で待っている唯のところへ向かった。

「急がなきゃならないときにジュースなんて買ってどうするんですか！？」

「後でわかるよ」

「？ と、とにかく急ぎますよ」

桂木の本音がサッパリわからなかったが、唯はとりあえず既に他の刑事達も向かっている現場に向かって走って向かった。桂木も一緒になって走ったが、さすがに若さの差というものか、どんなに頑張っても唯にはなかなか追いつけなかった。

「桂木さん、急いでください」

「ちよ、ちよっと待て」

桂木はすっかり疲れきって足を止めた。刑事として長く休みの日にはトレーニングなども行っているが、自分の足がそこまで遅くなっているとも思えなかった。

「お、お前、陸上か何かやっていたのか？」

「はい。高校時代に長距離走をやっていました」

「た、頼むからもう少しゆっくり走ってくれ。お前の速さについていけない」

「わ、わかりました」

本気で苦しそうにしている桂木の様子を見ては、唯もこれ以上は何も言えずに桂木の要求を呑むしかなかった。

「それだけ走っても息を切らさないのはたいしたものだな」

桂木は疲れを抜くかのようにゆっくりと歩きながら唯に言った。

「そうですか？」

「それだけの体力があれば犯人が逃走した際に追いかけて捕まえる事だって充分可能だ。少なくとも、それは立派な武器になる」

「あ、ありがとうございます」

唯は桂木から誉められたので何だか気恥ずかしいような嬉しいようなそんな気持ちが胸の中に生まれた。

「あそこか？」

すると、桂木が指差す方向には既に警官たちが到着していて現場に鑑識なども入っていて、立ち入り禁止の黄色いテープが張り巡らされていた。二人は野次馬を掻き分けて、立ち番をしている警官に警察手帳を提示して中に入ろうとした。

「ああ、そうそう。君、これを持っていてくれ」

桂木はさっき買ったジュースのパックを警官に渡してビニール袋は自分のポケットに入れた。

「桂木さん、こっちです」

「ああ」

唯が手招きをするので桂木も少し駆け足でドアに近寄って開けた。

「うっ…」

「ひどい臭いだな」

ドアを開いた瞬間、とてつもない異臭が漂ってきた。それがとても不快で、慣れていない唯は露骨に顔色を変えた。

「な、何でしょうか？ この臭い…」

ハンカチで鼻と口を覆いながら唯は桂木に訊ねた。桂木はしばらく何も答えずに玄関から中をじっと見ていたが、やがてゆっくりと口を開いて唯に向かってこう言った。

「お前も運が悪いな」

「えっ？ それはどうい…」

「すぐにわかる」

桂木はそれ以上何も言わずに玄関から家の中へと入っていった。

唯も慌ててその後を追いかけて家の中へと入っていった。

家の中は玄関先よりも強い悪臭が漂っていた。それも、現場に近づけば近づくほどその臭いは強さを増していった。

「遅くなった」

「ご苦労様です」

桂木も相当の古株である上に、人望も厚いので部下も桂木には一

目置いているし、信頼しきっていた。ある意味では課長の島津よりも人望がある。

「また厄介な仏さんみたいだな」

「ええ」

唯は会話の意味がよくわからなかったが何も問わずに静かにそれに耳を傾けていた。

「ところで、テツ。お前の相棒の柳沢はどうした？」

テツとは相田哲也のあだ名であり、このあだ名で呼ぶことができないのは課長の島津か桂木ぐらいなものである。相田もまた相当の古株だった。

「仏さんを見てギブアップ。まあ、気持ちはわからなくもないけどな」

「まだ二年目のあいつじゃさすがにそこまでの度胸を持ち合わせてはいないだろう」

「いや……それが、この仏さんはちょっと桂木さんの考えている以上でして……」

「どういうことだ？」

何やら言い渋っている相田に桂木は訊ねた。相田は桂木と唯を交互に見ていてなんとも煮え切らない態度を取っていたので、桂木が先に言った。

「とにかく、仏を見せろ。それから話を聞いてやる」

「は、はい。じゃあ、とりあえず桂木さんだけ見てください。茜沢はその後だ」

唯は仲間はずれにされたような気分になったが、相手が自分より上の先輩であるので何も言い返すことができなかった。桂木は別室に移された遺体を見るためにその部屋に入っていた。

「こちらが遺体です」

通された部屋には遺体とそれを見張る警官がいた。遺体には青いシートが掛けられていて中は見えなかったが、異臭の原因がその遺体からだと言うことだけははっきりとわかった。

「早速見せてくれ」

「はい。君」

「は、はい」

その警官は少し何かに怯えるような表情を見せながら、遺体をかぶせているシートに手をかけた。シートを持った警官の手が震えているのを見て、桂木がその警官に声をかけた。

「大丈夫か？ 震えているぞ」

「は、はい。大丈夫です」

言葉こそ強がってはいるものの、体の震えはそれが嘘であることを証明していた。桂木は大きいため息を吐いてその警官に言った。

「君、今はいいから呼んだらここに戻ってきてくれ」

「は、はい」

警官はまるで桂木の言葉が天の助けであるかのようにすぐにこの部屋を出て行った。

「やれやれ……情けないな」

「まあ、気持ちはわからなくてすけどね」

「おいおい、テツ。お前までそんなこと言ってどうするんだ」

「まあ、とにかく仏さんを見ればわかりますよ」

いつもと様子の違うテツをおかしく思ったが、桂木はとりあえず死体を確認することにして、かぶせてあるシートをめくった。

「うっ……」

桂木は思わず言葉を失った。さっきからの周りの反応もこれを見ればさすがに納得せざるを得なかった。

「これはひどいな……」

「どうするんです？ 桂木さん」

「何が？」

「茜沢ですよ」

桂木はまた言葉を失った。ある程度のことは予想してここに来ていて唯にも当然経験を積みせるつもりだが、さすがにこの死体は長年刑事をしている桂木でも思わず言葉を失ってしまうものだった。

「……刑事が死体を見ないでどうする？　俺が連れてくる」

桂木は死体にシートをかぶせて部屋を出て、唯がいる部屋へ行った。唯がいる遺体の見つかった部屋へ戻った。

「茜沢、こっちへ来い」

「はい」

初めての現場で何をしていいかわからずにその場に立ち尽くしていた唯はすぐに桂木のところへ行った。

「お前、この臭い何だかわかっているか？」

「はい。恐らくは腐敗臭ではないかと思えます」

「正解だ。つまり、死体がどんな状況になっているかはわかっているな？」

「はい」

「覚悟を決めておけよ」

「お言葉ですが、私だって一応それなりの覚悟をして刑事をやっています」

「ただ腐敗が始まっている死体なら俺もそんなことなど聞かないよ」

「それはどういうことですか？」

「言葉で聞くより直接見たほうがいい。もっとも、最初の事件であるの死体を見ても平静を保てたら誉めてやる」

桂木の意味ありげな言葉に唯は疑問を感じたが、質問する間もな

く死体の安置してある部屋に連れてこられた。

「これを持っておけ」

桂木はさっきのファーストフード店のビニール袋を唯に渡した。

唯はそのことに腹を立てたが、反論をする前に桂木に行動を起こさ  
れた。

「テツ、もう一度シートをどけて見せてくれ」

「茜沢、気分が悪くなったらすぐに外へ出る。現場を荒らしたくはないからな」

相田は前もってそう言うてから死体にかぶせていたシートをどけた。  
た。

「うっ！！」

唯はその死体を見た瞬間、思わず口を押さえた。そして、強烈な吐き気を催してきたが、何とか必死になってそれをこらえていた。

「無理をするな。気分が悪くなったのなら現場を出ろ」

「だ、大丈夫です」

唯の顔色はどんどん青くなっていったが、何とか嘔吐することだけは必死になってこらえていた。

でも、それが長続きするわけもなくそれからすぐにビニール袋を手にして唯は現場を飛び出て行った。

「思っていた以上に長持ちしたな」

「当分うなされるんじゃないですか？」

「……そんじよそこらの警官より根性はあるようだ。すぐに立ち直ってくれるだろう」

「またそんな根拠のないことを言っ……」

「人間の心理にいちいち根拠のある説明ができるのなら、そいつは天才だよ」

桂木は死体を見ながら相田に向かって話していた。

「それにしても、何を考えて死体の顔を潰したんでしょうか？」

相田は死体を見ながら桂木に聞いたが、桂木にそんなことがわかることもないので返事もしなかった。

「死体の顔を潰したこともそうだが、どうして両乳房を切り取っているんだ？」

更にこの死体には両乳房を切り取られていて胸の部分が真っ赤に染まっ……ていて、そこが腐敗……して……いて……蛆もわ……いて……いた……。

「何らかのメッセージですかね……？」

「乳房か……何を意味しているんだ？」

「さあ？」

すると、唯が再びこの部屋に戻ってきた。さっきまで血色の良かった唯の顔が、今では真っ青になっていた。

「どうだ？　少しはましになったか？」

「は、はい……」

「ところで、お前はこういう服を着るか？」

死体に着せられている服を見て唯に訊ねた。顔は潰されているから相手がどんな顔だったかはわからないが、肌の皺や髪が白髪になっていてことから、相手はこの家の主人である老婆であった可能性は高い。

但し、奇妙なのはその着ている服装だった。年をとった人が着る服と言うよりは若い娘が切るような少し露出の多い服だった。

「私は……着ませんね。こういう服は私よりもっと若い世代、十代ぐらいの子達が着ていることのほうが多いですね」

「そう……だよな」

「この人、こう言う服を好む人だったのかしら？」

「だが、相当歳を食っているぞ。いくらなんでも六十ぐらいの女がこんな服を日常で着るとは思えないぞ」

「わからないですよ。母親が若い子供の服を借りて自宅を着ていたりするらしいですよ。私も自宅で母が着ているところを一度だけ見たことがあります」

「この人の場合は娘どころか孫がいてもおかしくないだろう。孫の服を借りるとは思えないし、娘の服にしても若すぎる」

「……ですよね」

「まあ、あとは検死の結果を待つしかない。俺達はここを任せて小学校へ行くぞ。ただでさえ時間がなさ過ぎるんだ。俺達は急いで情報をかき集めるんだ。窓口が俺となっている以上は、パートナーのお前にも一緒に来てもらうぞ」

「は、はい」

「じゃあテツ、後は任せたぞ」

「わかりました」

桂木は相田に現場を任せて、唯と一緒にあの小学校へ向かった。腕時計を見ると時間は既に三時を大きく過ぎていて五時になっていた。

「お待たせいたしました」

小学校へ行くとすべてのアンケートの回収が既に終わっていた。さすがに全校生徒分となると四百枚以上あるので、目を通すだけでも苦労しそうになる。

「すいませんが、迎えが来るまでアンケートに目を通したいので教室をお借りしていいですか？」

「ええ。構いませんよ。どうぞ、お使いください」

桂木は唯と一緒にアンケートを会議室に運んで、車が来るまでそこでアンケートに目を通すことにした。

「さすがに数が多いですね」

「しょうがない。それより、これを持って急いで宮園邸戻るぞ。もうすぐ七時だ。犯人からの電話もあるだろう」

桂木は適当にアンケートに目を通していった。アンケートは真面目に書いてあるのもあれば不真面目に書いてあるものもあって、桂木が期待しているような結果にはなっていなかった。

「やれやれ。ただのアンケートだと思って適当なことを書いているのが多いな」

「しょうがないですよ。相手は小学生なんですから。本当に怪しいかどうかなんてわからないでしょう」

「まあ、共通した意見もあるからそれを調べて調査をしてみる……」

桂木はパラパラと見ていたアンケートのある一枚を見て思わずそれをじっと見つめていた。

「どうかしましたか？」

唯の質問に答える前に桂木は席を立ち、職員室へ戻った。職員室に入るときよろきよろと辺りを見渡して、手近にいた教師に話しかけた。

「すみません。ちょっと、出席簿を貸していただけませんか？」

「えっ？ 出席簿を……ですか？」

「ええ。欠席している生徒に後で私達から親御さんに連絡いたしま

すので」

「ああ、そうですか。わかりました」

教師はすぐに全クラス分の出席簿を持って、桂木の前に置いた。

桂木はすぐに出席簿に目を通した。

「一体、どうしたんですか？」

桂木は何も言わずに唯にその出席簿を手渡した。

「この出席簿がどうし……」

唯も思わず言葉を失ってしまった。

「これって……」

「どういうつもりだ……？」

すると、職員室のドアが開いて数人の刑事が入ってきた。

「桂木さん、お迎えに上がりました」

「……」

「どうかなさいましたか？」

「いや……何でもない。このまま例の所へ向かってくれ」

「わかりました」

「茜沢、お前も手伝ってやれ」

「はい」

数人でアンケートを車のトランクに詰め込ませて、桂木は校長に学校の協力に感謝して車に乗り込んだ。

「桂木さん……あれは一体どういうことなんですか？」

「さあな……犯人に直接訊いてみたらわかるだろう」

表情には出さないものの、桂木は苛立っていた、傍にいて一緒に話している唯にはそれがわかっていた。

車が到着するとすぐに桂木は家の中に入って中で待機していた刑事達に異常の有無を尋ねて電話の前で待った。

「あ、あの……刑事さん……」

すると、直哉は既に帰宅していて桂木の帰りを待っていたようだった。その表情からどれだけ心配していたかは想像するのに難くない。

「て、手がかりは掴めましたか？」

「……ええ。手がかりと言うか何と言うべきかわかりませんが」

時計を見ると七時前だった。桂木も電話の前で犯人からの電話を待ち、刑事達の表情にも緊張感が漲ってきた。

トゥルルルル……。

電話の着信音が静かな部屋に鳴り響いた。すぐに逆探知を始め、確認をとってから桂木が電話に出た。

「もしもし」

「相変わらず逆探知ですか、どうせ無駄ですよ。こっちもこのゲームには文字通り全てを賭けていますからね。そんなことで捕まるよ

うなへまはしません」

電話先の犯人は相変わらず余裕のある声で桂木に話していた。

「さて、私の名前はわかりましたか？」

「残念だが、まだわからない」

「そうですか」

「何のつもりだ？」

桂木にはその言葉を聞いて、電話の向こうにいる犯人がにんまりと笑ったような気がした。

「さて、何のことでしょう？」

「とぼけるな」

「ふふふ。面白かったでしょう？」

「ああ。あんなことは俺が刑事になって生まれて初めてのことだよ。まさか、誘拐した子供を何事もなかったかのように学校に通わせているなんてな」

その言葉を聞いて、周りの刑事達も宮園絵美の両親も驚きを隠せなかった。それはさっきまでの桂木や唯と同じ表情をしていた。

「ふふふ。私は結構自信あったんですよ？ まさか、誘拐した人間をいつもどおり学校に通わせてやる犯人なんて普通はいないですか  
らね」

「ああ。こんな真似をされたのは生まれて初めてだ」

「とりあえず、今日は私の勝ちですね」

「悔しいがそのようだな。それより、子供は無事だろうか？」

「勿論。何度も言うようですがあの子は大切なゲストです。ルールさえ守っていただければそれでいいんです。ルールはきちんと守ってくださいているのですからそれでいいじゃないですか」

「そうだな……。子供の声が聞きたい」

「申し訳ありませんが、今はまだ食事の最中です。明日の朝、声を聞かせると言うことでよろしいでしょうか？」

「……わかった」

「それでは明日の午前七時にまたかけます」

電話を切るかのような台詞を言った後、犯人は何かを思い出したかのように桂木に向かって話しかけてきた。

「そうそう。明日は小学校も会社も土曜日でお休みですね。ご両親にもいい休日を、と伝えてください」

犯人は最後にそれだけを言って電話を切った。逆探知の結果を聞いた刑事は首を横に振った。今回も逆探知は失敗に終わっていた。

「一体……一体、警察は何をやっていたんですか！！」

電話が終わると直哉は堰を切ったように怒鳴りたてた。無論、桂木にも唯にもその理由もその正当性もわかっているので何も言い返せなかった。

「娘が学校に行っていたのなら保護するには絶好の機会だったじゃないですか！ それをみすみすまた犯人に連れて行かれて……あなた達は本当に娘を助け出す気はあるのですか！？」

「お怒りは……ごもつともです。この一件は全て我々のミスでした。それは弁解のしようもありません」

「桂木さん……」

「ですが、必ずお嬢さんは助け出しますので、どうかご協力ください。お願いします！」

桂木はその場に膝をついて土下座をして宮園夫妻に謝罪した。周りは何も言えずに、そんな桂木の様子をただ見ているしかなかった。宮園夫妻も桂木の謝罪に対しては何も言わずにそれ以上責任を追及しては来なかった。

「茜沢……」

「は、はい」

「何としてもあの犯人を捕まえるぞ。絶対に……だ」

「はい」

桂木の体は小刻みに震えていた。言葉に力がこもり、異様な迫力が今の桂木にはあった。周りの誰もが、桂木の震えは例えようもない怒りから来ているものだと言うことを察していた……。

